も含ましめ、古今の凡てを網羅した點にある。

上篇は第一編を先史時代とし、第二編を有史時代とし殊に城廓の變遷、儒教關係及び道教關係の神廟、佛教關係の寺廟について詳述され、下篇に於ては第一章に奉天以北の先史時代を、第二章に其有史時代を、第三章には安奉沿線の諸舊蹟を收めてある。續志の方は多少趣を異にしてゐる。滿州は遼河の東西によつて其歷史傳說に大きい相違があり、民族上より云へば遼西は東胡で遼東は扶餘派とも云ふべく、面白い對照をなして居る。八木氏は先づこれらの渤海灣の周圍に棲息した古代の民族竝に彼等と漢民族との文化交涉を闡明せんとされたが旅行不可能の爲に上に述べた如く昭和三年秋遼西の一部及び遼東の缺漏を視察して他の特種調査を省略して本書の發行をみるに至つたのである。それで先づ總論に於て、渤海岸の古民族と先史時代の關係、鮮卑族と慕容氏の興亡、佛教の東漸と民族關係等の題下に一般大勢論を述べた後第一章を遼東、第二章を遼西、第三章を關東州の記述にあてられてゐる。其中にも撫順玄菟論、及び南蘇新城と南北山城子論の如きは、皆實地上の觀察に基いたもので机上の空論とは異り注目すべきものと思ふ。下篇の終には古蹟分布略圖を付し各冊八木氏自ら筆寫の略圖、及び舊教育研究所の田中秀作氏が撮影した一部の寫眞を入れ理解を助けてゐる。筆者も云はれる如く、概して興味本位ではなく多少堅苦しい觀もあるが、元來一時眼前の便のみを圖つたものでないから、寧ろ將來には却つて稗益する所があると信ずる。實利的統計的紹介と別に此書によつて滿州の紹介される事は意義深いものと云はねばならぬ〔今石〕

◉史學概論　野々村戒三著

事物を史的に考察することが近時あらゆる方面で重要視されるやうになつて來たが、世人の多くは未だ史學に關する明確なる知識を具へず動もすれば誤つた觀念を懷いてゐるものが少くないので本書は世人に史學とは如何なるものであるかといふ概要を知らしめやうとするもので、全編を原理論と方法學との二部に分ち、前者には史學の概念、歷史認識、歷史の分類、史觀の變遷、の四章

を、後者には總說、史料學、史料批判學、綜合、表現の五章を立て、附錄には史學に對する疑義、史學と社會學古文書學及び古書學に就いて、歷史の教育的價値、の四編を收め、最後に史學に關する參考書を懇切に紹介してある。その所說は著者が斯界の碩學の先蹤を重んずるといふ念慮に基づいて東西諸學者の權威ある論著を要約されたものであるから讀者は之によつて史學に關する大體基礎的知識を了得することが出來る（四六版、三九二頁、東京、早稻田大學出版部發行、價二、五〇）〔松野〕

◉近世世界政治外交史論　文學士吉村勝治著

近代の生活は凡て國際的なるところに大なる價値を置かうとしてゐる。政治の進運、經濟、學術、藝術、思想等の發展も、この世界的進步を理解せずには眞個の判斷をなし得ない。殊に最近の政治と外交は實に複雜微妙な國際關係を基礎として動いてゐる。かゝる世界の國際關係の眞相を知るにあたつて、日々の新聞紙上の記事は其の局部の報道に專なるために、大勢の推移を總攬しがたい。この點に於て適當なる最近世史が一般國民常識の上にも必要とせられる。しかし歷史家の研究は、概ね距りたる時代に寧ろ興味を置き、最近の情勢を知るべき基礎としての歷史は、專門的研究は別として、多く顧られないさまである。本書は其書名の示す如く、「自佛蘭西革命至ロカルノ條約、近世世界政治外交史論」として著者が特に現代生活と關係深き近世の世界史的進展を總括せんとの企圖より、編まれたものである。浩瀚なる專門的著述がもつ難解なる事實の細叙、教科書的編著にある無味乾燥のいづれの弊にも陷ることなく、其方法に於ては學術的にして其目的にあつては實用的なるを期して、著者が立命館大學、大谷大學に於ける近世史講義の經驗より廣く政治外交の全般に亙りて史實と評論を適當に處理按排してこの論述をなしたものである。

從つて本書の特色はこゝにあつて、全體に於て繁簡よろしきを得、記するところは佛蘭西革命の思想的方面より那翁及那翁戰爭、產業革命、米國モンロー主義、英國選擧法改正、普佛戰爭、英國政黨政治及二大政治家、愛蘭問題等種々興味ある問題によつて章節を立て、更に三